

人とクマとの共生を考えるフォーラム

議事録



秋田県

知事挨拶

皆さん、こんにちは。「人とクマとの共生を考えるフォーラム」にこのように多くの皆さんにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。最初、「ミルハスの中ホールでやる」と事務方に聞いた時、ガラガラになるのではないかと不安に思っておりましたが、2階席も含めて本当に多くの県民の皆様においでいただきました。これは私たちが直面するクマの問題に対する関心の高さ、危機感の表れであろうと受け止めております。



昨年の秋、皆さんご承知のとおり、本当に多くの方がクマによる被害に遭われてしまいました。落ち着いて散歩にも行けない、玄関を開ける時に注意しないといけないという、日本に住んでいながらこんなことがあっていいのかという事態になってしまったこと、私も行政の長として大変申し訳なく思っております。昨年、全国初めての自衛隊の支援要請は随分注目されましたが、私としては窮余の策であり、県ではどうにもならないからお願いをただけのことであって、本来はあんな事態にならないようにするのが私たちのやるべき対策であると思っています。

今月、新年度から自然保護課だけでなく、農林水産も建設も教育委員会も警察本部も、全庁を挙げて「今年こそは人の生活圏における人身被害をゼロにする」という目標を掲げ、予算もつけて対策を進めることとしております。ただ、4月にはもう街中にクマが出没しております。自然相手であり、広大な県土面積を誇る秋田県で、そう簡単にクマの出没をゼロにすることはできません。クマが出にくい環境を作る、出てきたとしてもいち早く情報として共有する、万が一遭っても正しい対処によって被害を防ぐ。各段階で良いところを少しずつ皆で頑張りながら被害を下げていくというのが私たちのできる対策だと思っています。そのためには行政だけでなく、県民の皆様一人ひとりのお力をお借りすることが大変重要です。

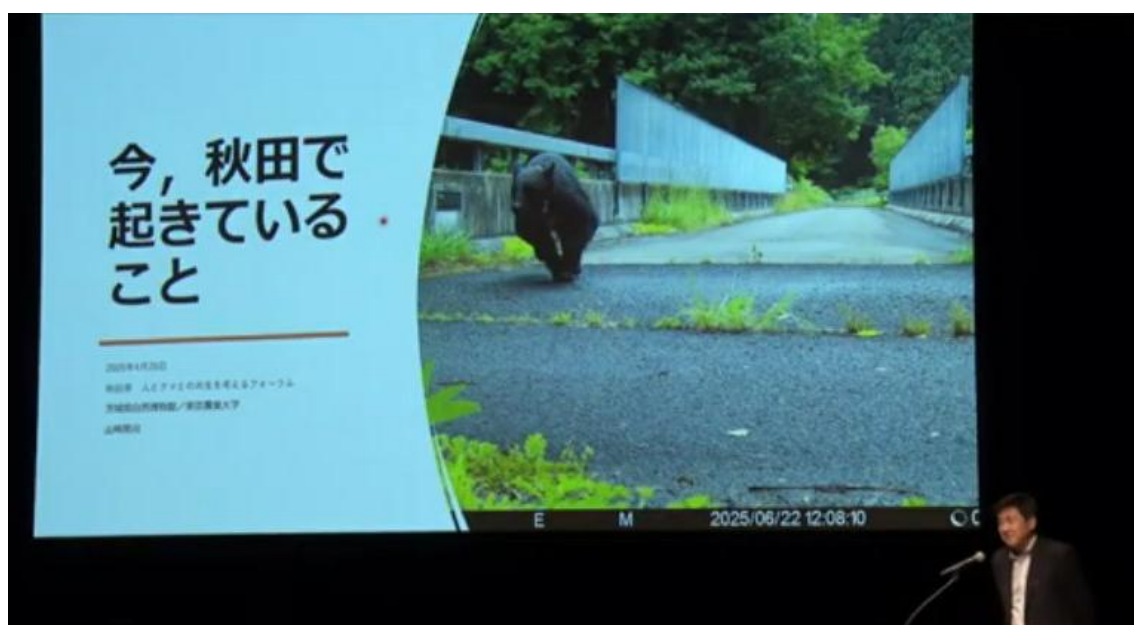
今日はそのために、日本のクマ研究の第一人者である山崎晃司東京農業大学名誉教授をはじめ、ツキノワグマに関する様々な分野の専門家の皆さんをお招きして、人とクマとの共生について考えようとフォーラムを開催いたしました。今日お聞きいただいた内容を是非皆さん一人ひとり、そしてご家族やご近所の方とも共有していただいて、みんなで力を合わせて、令和8年度のクマによる人身被害をゼロにするように力を合わせていただければと思います。今日はどうぞよろしく願いいたします。

第1部 基調講演

基調講演「今、秋田で起きていること」

山崎晃司（東京農業大学 名誉教授・茨城県自然博物館 館長）

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました山崎です。ニュースで時々見かけるとご紹介いただきましたけれども、本人としてあまり嬉しくなくて、どうせならもっと明るいニュースに出て色々な話をしたいというのが本音です。今日のようなフォーラムを知事が決めて開催してくださっているのはすごくいいことだと思います。このフォーラムをきっかけに、秋田県のクマの管理がさらに前進することを願って、私からお話をさせていただきます。



（スライド p.2）

皆さんもなぜこんなに秋田県でクマの出没が多いのだろうかという疑問に感じていらっしゃるかと思います。秋田県のクマの分布の広がり、突然起こったわけではありません。遡ると、2000年代最初の頃に今と同じような分布域になっていたことが分かっています。それに加え、人口の減少や高齢化、集落の消滅が起きています。山沿いに広がる里山の風景での農業形態も変化し、耕作放棄地が増えたり、減反でお米の代わりに育てている農作物がきちんと管理されていなかったりしています。色々な要因が重なって、秋田県の中で人間の生活空間、集落周辺に行動圏を構えるクマが増えてきていると考えています。

（スライド p.3～6）

1978年、2003年、2017年の日本全国のクマの分布調査を見ると、秋田県と岩手県では2003年の時点で70%以上の県域にクマがいる状態になっていました。2017年には秋田県

の約 93%にクマが分布しています。青森県はそこまで広がっていません。20 年かけてじっくり分布域が広がり、生息密度も上がってきているのが秋田県と岩手県です。これを解決するためには、すぐに人身事故ゼロになるかという点と難しいですが、時間をかけて元の姿に戻していく決意があれば必ず戻っていけると思っています。

(スライド p.7~10)

私たちが数年前から共同で行っているクマの行動追跡調査の結果をお話しします。クマに GPS やビデオカメラをつけて追跡すると、東西で 60km~70km と非常に広い範囲を動くことが分かります。秋田県だけでなく、岩手県や青森県と歩調を合わせた管理が必要です。また、集落周辺に出ているクマの活動パターンを見ると、若いオスのクマがソバ畑でソバの花を食べている時、本来昼行性のクマが夜に活動し、昼は周辺の林に隠れていました。半分人間に依存し、半分は山で普通の生活をしている状態です。問題はこういうクマを作ってしまうことと、エスカレートすると昼間も集落周辺で活動するようになる可能性が高いことです。

(スライド p.11~13)

別のオスのクマの追跡では、1 年の間にだんだん市街地に近づいてきていました。人慣れが進んできている状態です。なぜ人慣れが起きるのかを突き詰め、捕獲するだけでなく、次にこういうクマが出てこないために何ができるかを考えないといけません。

(スライド p.14~16)

ツキノワグマは県境を気にしません。地域集団ごとに管理していく必要があります。本州には管理ユニットが 18 ありますが、秋田県にはそのうち 3 つの管理ユニットがあります。秋田県のクマの生息数は約 3,900 頭と推定されています。西日本のように年間 15~20% 増えていくと仮定すると、かなり増える動物だということが分かります。西日本の兵庫県や島根県は先進的なクマの管理をしていますが、クマが分布する面積が少なく、人口も多いです。秋田県はその倍以上の面積を少ない人口で管理していかなければなりません。大変だということがご理解いただけるかと思いますが、私は秋田県が東北の先頭に立って旗を振ってもらいたいと常々思っています。秋田方式、あるいは北東北方式と言われるクマの管理の手本を見せられるようになっていと思っています。

報告「秋田県のクマの現状と対策」

柏倉 誠（秋田県生活環境部自然保護課 課長）



（スライド p.1）

秋田県自然保護課の柏倉です。県の総合計画で示した将来の秋田の姿のイメージでは、人は町に、クマは山にという棲み分けができていく様子を描いています。これに向けた県の現状と対策をお話しします。

（スライド p.2～5）

2023年と昨年は、秋から冬にかけての出没数が極端に多く、人身被害も多く発生しました。秋田市の中心部にも出没し、これまで出没がなかった住宅街のど真ん中にもクマが出るようになったのが大きな特徴です。

（スライド p.6）

緊急銃猟の際も、人の前で平然と畑のものを食べたり眠ったりするクマがおり、人に対する緊張感が低下してきていると考えられます。

（スライド p.7～8）

捕獲数も増加しており、昨年は2,800頭を捕獲しました。10年前と比べると10倍から20倍近い数です。出没や被害が頻発するうちは捕獲を続けなければなりません、必ずしも全てを捕獲できるわけではありません。また、クマの数が減っても集落の中に柿や栗などおびき寄せるものがあるままでは出没は続きます。捕獲と同時に、クマが出にくい環境を作ることも進める必要があります。

(スライド p.9~15)

対策は大きく分けて「出没を防ぐ」「事故を防ぐ」「捕獲する」の3つです。出没を防ぐ環境整備として、クマを引き寄せる栗や柿の木の伐採、公園のヤブの刈り払い、農地への電気柵の設置指導を行っています。また、市街地に入ってくるルートを遮断するため、高速道路下のアンダーパスに電気を流すチェーンやマットを設置する研究も行っています。

(スライド p.16)

人とクマの棲み分けを図る「ゾーニング管理」として、人が生活する防除排除地域と、クマが棲むコア生息地域との間に緩衝地域を設け、その中の管理強化ゾーンで捕獲を進めたり、人が入り込むことで、クマの人間への警戒心を高め遠ざける取り組みを進めています。

(スライド p.17~18)

行政による対策は今後も強化していきませんが、行政だけで解決するのは非常に困難です。県民の皆様にも自助、共助の視点で対策にご協力いただきたいと考えています。情報発信として「クマダス」のアプリ化やYouTubeでの動画配信も行っています。家の周りの管理や地域での刈り払いなど、それぞれができることを心がけ、みんなで人身被害ゼロに取り組んでいきたいと思ひます。

第2部 パネルディスカッション

パネリスト

山崎晃司氏 (東京農業大学 名誉教授・茨城県自然博物館 館長)

小池伸介氏 (東京農工大学大学院農学研究院 教授)

星崎和彦氏 (秋田県立大学生物資源科学部 教授)

佐藤寿男氏 (秋田県猟友会 会長)

鈴木健太 (秋田県知事)

(進行 近藤麻実：秋田県自然保護課・ツキノワグマ被害対策支援センター)

導入

(近藤) 皆さんこんにちは。秋田県自然保護課の近藤と申します。早速パネルディスカッションに入っていきたいと思ひます。まず第1部での山崎先生の基調講演を受けて感じたことを、知事にお伺ひします。

(鈴木知事) 私たちが直面している事態が決して急に起きたものではないということを知りました。何十年もかけて生息域の拡大がじわじわと進んできていたわけですね。また、西日本の成功事例と比較しても、人口に対する面積やクマの生息数の比率が全く違うため、

新しい技術や県民を挙げての運動など、相当違う前提に立った対策をしなければならぬと感じました。

(近藤) 今年度の出没予想について、山崎先生いかがでしょうか。

(山崎氏) 難しい質問ですが、昨年の秋は堅果類の実りが悪かったため、冬眠から覚めたクマはそこまで体脂肪を蓄えていない状態だと思います。その影響がどう出るかは分かりませんが、昨年かなりの数を捕獲して個体数抑制ができたと考えれば、今年は出没が低く推移するのではないかと期待を込めて思っています。



対策のゴールとは

(近藤) 対策のゴールについて皆様からお伺いします。知事が考えるクマ対策のゴールはどのような姿でしょうか。

(鈴木知事) 今年度からの総合計画では、人の生活圏における人身被害をゼロにするという目標を明確に掲げました。急にクマの出没をなくすのは簡単ではありませんが、気をつけて出没の可能性を下げ、出た時の対処を適切に行い、少しずつ被害を下げてゼロを目指します。ただ、人身被害ゼロだけでは私たちの生活は元に戻りません。中長期的にはやはりかつてそうであったように「町にはクマは出ない」というところをしっかりと目指していくのが最終的なゴールだと思っています。

(星崎氏) 本来目指すべき「クマが出てこない社会」はそう簡単にはできません。情報に過剰に踊らされず、適度に正しく恐れることを通じて、「クマに強い社会」をすぐに構築する必要があると思っています。

(近藤) 秋田県は「人とクマが棲み分けをする」というビジョンを掲げています。人とクマとが同じ空間を共有するということではなく、人は町で、クマは山で、それぞれ暮らすことで衝突を防いでいきたいと思います。知事や星崎先生からも同様のお話があったかと思います。対策のゴールは棲み分けという共通認識のもと、議論を進めていきます。

棲み分けの実現に向けて何をすべきか

(近藤) 棲み分けの実現に向けて何をしなければならないのか、「捕獲」「環境整備」「普及・研究」の3つに分けて進めます。

①捕獲

(近藤) まず捕獲について、小池先生、秋田県はたくさん捕獲していますが絶滅の心配はないですか。

(小池氏) 現状のマンパワーや東北の山の深さを考えると、現状の捕獲を続けて絶滅することはまず考えにくいです。問題はクマの数が増えて分布が広がり、人の住む場所と隣り合い、いてはいけない場所にもクマがいる状況があることです。地域の人々が安全に暮らすため、管理強化ゾーンなどクマがいてはいけない場所のクマは優先的に捕獲していく必要があります。どこでも獲ればいいのではなく、どこでどう獲るかが大事です。また、捕獲だけでなく環境整備や被害防除対策と両輪で行うことが重要です。

(近藤) 個体数の推定について、推定値はどのぐらい正確なものなのでしょうか。

(星崎氏) 動物の個体数推定は難しく、見つかっていない個体が一定割合必ず存在するため、過小推定しがちという傾向はあります。

(山崎氏) クマは県境に関係なく動いているため、管理ユニットごとに個体数を調べないといけません。環境省も今年から東北を対象にブロックごとに個体数推定調査を始めます。これにより、個体数の水準をどれくらいにすればいいのか、どれくらいまで捕獲すべきかという議論ができてくると思います。

(近藤) どこでどのように捕獲すると良いとお考えでしょうか。

(小池氏) 我々が住んでいるすぐ裏にクマがいる状況で、大量出没する予備軍のようなクマをまず取って数を抑えることが必要です。ここ1~2年の超短期的には、箱わななどを使って管理強化ゾーンのクマを徹底的に獲っていく。出てきたクマを獲るだけでなく、出る前に獲るという視点が必要です。

(近藤) 家のすぐ裏山に入ってクマを獲ってほしいと言われた場合、いかがでしょうか。

(佐藤氏) すぐ獲りたい状態ですが、人が揃わないのが現実です。若手ハンターを育成するようお願いしていますが、全体としては高齢化で減っている状況です。県民の皆さんにもハンターになっていただくよう運動していかなければいけないと考えています。また、家の近くでの銃猟は危険なため、できるだけ箱わなを使って捕獲いたします。

(鈴木知事) 2023年度・2025年度の大量出没年に2,000頭を超える大変な数のクマを捕獲しました。捕獲には様々な目的がありますが、ほとんどが有害捕獲、人里の出てきては困る場所に出てきてしまった、農作物に被害を与えてしまった、そういった個体をやむなく獲ったというものです。それだけで2,000頭を超えてしまったという実態を理解いただきたいと思います。

②環境整備

(近藤) 続いて環境整備についてです。人の生活圏の環境整備として何が必要でしょうか。

(山崎氏) 人手が足りない現状を考えると指摘することも憚られるが、耕作放棄地や管理されていない農地、家の周りの柿や栗など、クマを引き寄せる誘引物をきちんと管理することが重要です。農作物としての価値がない農作物は土にすき込んでクマが食べられないようにする、庭の犬の餌を放置しないなど、どこにでもクマがいる前提で環境整備をやってもらうことが大事です。クマの分布を後ろに下げるまでは、そうしたことをしないと問題は解決しません。

(近藤) 人側、私たちの身の回りの環境整備についてコメントをいただきました。クマが生息している山の中の環境も重要ですが、森林の変化がクマにどう影響しているをご覧になっていますか。

(星崎氏) ブナ林地帯では大きな変化はありませんが、スギ林が多かった地域で人が撤退し、クマの進出が進んでいます。また、出羽丘陵などではナラ枯れが深刻化しており、ドングリが枯れて餌がなくなり、人里に出ざるを得ないシチュエーションになっているのではないかと感じます。人が撤退した二次林は色々な木の実があり、クマにとって餌の多い環境になっています。

(近藤) メガソーラーや風車がクマの生息を脅かしているのではという意見もありますが、いかがでしょうか。

(小池氏) 私が見ている限り、昔からクマがいたような山奥にメガソーラーがあるケースはありません。山奥の環境が劇的に悪くなったわけではなく、人が撤退して森が広がっている状況です。生息地での環境整備として求められているのは、管理強化ゾーンの環境を、クマにとって魅力的でなく住みにくい森に変えていくことです。捕獲で時間を稼いでいる間に、環境整備を実現していく必要があります。

(近藤) 環境整備を進める上で、山のキイチゴなどの管理はどうしたらいいでしょうか。

(星崎氏) キイチゴを駆除するのは非常に難しいですが、林業を行うのが一番良いです。人間が一生懸命刈ることでクマも減ります。ただ、マンパワーがないため解決策が見つからず悩んでいます。

(山崎氏) 集落の周りにある全ての誘引物を管理するのは不可能です。クマにプレッシャーをかけ、そこに来ることがすごく嫌な思いをする場所だと学習させることが重要です。

③普及・研究

(近藤) 最後に普及と研究についてです。星崎先生も様々な場所でご講演をされていると思いますが、どのような方々に対してどのようなお話をされていますか。

(星崎氏) 市町村や商工会、学校のOB会など様々な立場の方から依頼を受けます。先日弁護士団体向けの講演機会があったため、持ち主不明の果樹の法的な対策についてお願いをしてきたところです。

(鈴木知事) 県としても国に対して昨年度から要望をしていますが、民法の改正などは難しいという感触を得ています。時間のかかる法改正を待ってられないため、現行の法制度でできることを着手しているところです。

(近藤) 大量出没の前にそういった対策を進めていきつつ、大量出没をそもそも起こさないよう、そのメカニズムを解明するための基礎研究も重要と考えられます。どのようなデータを集めれば良いでしょうか。

(山崎氏) 捕獲個体の歯から年齢を、子宮を調べて出産数を調べることができ、例えば増加率が分かります。クマの体からは様々な情報を得られるので、秋田県でもぜひ進めると良いと思います。

(近藤) ここまでのところでお感じになったことをお聞かせください。

(鈴木知事) 個体数管理については、国が昨年度対策パッケージを示すなど本腰を入れた形になっています。個体数推定調査も県をまたいだ形で実施して下さるということなので、それを踏まえてどれくらいの数字にすべきか、科学的に出していかなければならないと考えています。北東北3県ということで、岩手・青森の知事ともクマ対策を隣県で手を取り合って広域に進めていましょうというところで合意をしています。

クマを追い上げていくという点では、春季管理捕獲ということで市町村の皆様に捕獲活動に取り組んでいただいています。銃を持った人が山に入ることによって抑止力にも繋がると思うので、この活動をさらに広げていきたいと考えています。

普及については、本日休憩中に流していた YouTube 動画などを活用しながら、広く気軽に正しい知識をお届けすることを進めていきたいと考えています。



対策の主体とは

(近藤) 自助・共助・公助の話がありましたが、地域で対策を進めるヒントはありますか。

(星崎氏) 一般の人がクマを捕まえることはできませんが、例えば「なべっこ」のような活動で人が集まることで、結果的にクマが人里を避けるようなことにつながれば希望があると思います。行政任せにせず、自分たちで積極的に動くことが大切です。

(近藤) 人口減少社会にあって、私たちはクマとどう向き合っていけばいいでしょうか。

(星崎氏) クマが出てきてもパニックを起こさないよう、少しずつ慣れていく必要があります。「クマダス」の情報をフル活用して、自分ごととして予測し、気を付けることが大切です。

(小池氏) クマとの共存は、出てきたクマを駆除することではなく、町に出てこない状況を実現することです。常にクマにプレッシャーをかけ続け、山に押しとどめるという意識の転換が必要です。

(山崎氏) 人口が減っていく中で、少ない人口で何ができるかを考える時期に来ています。諦めずに知恵を絞り続けることが、最終的には野生動物管理につながると思います。

(鈴木知事) クマ問題の大きなきっかけになっているのが秋田県の人口減少です。秋田県の急激な人口減少を食い止めることが私の目標ですが、そのためにもクマ問題は抜本的に解決しなければなりません。短期的には人身被害を防ぐため、科学的な根拠に基づいて捕獲を行っていきます。現在の東北の頭数を前提にすると、ある程度捕獲を進めなければ他の対策の成果を得られません。これは県民の人命を最優先としたやむを得ない措置であることをご理解いただきたいです。また、調査研究の機能も独自に持ち、科学的な研究を進める準備をしています。行政と県民の皆さん一人ひとりの力をお借りしながら、賢く付き合い、棲み分けの努力を進めていきたいと思っています。一緒になって安全な秋田を作ってまいりましょう。よろしくお願いいたします。